



第 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

仕事はひと段落していなかったが、ふらふらすることにした。俺はふらふらしたかった。だから昼過ぎ、実家から送ってきたそばを山ほど食べ終えてから、家を出た。そばは納豆そばにした。夏は納豆そばが無性に食べたくなる。太陽はまだ高く上り、強い光を落としている。鍵を閉めると同時に汗が噴き出してきて、しかしからりと風が吹いたので心地いい。

出掛けに井上くんからおつかいを頼まれた。牛乳を買ってきて欲しい、とのことだった。そういえば今朝飲んだ牛乳は少し味が変わっていた。やはり安かったからといってあんなに買い込むべきではなかったのだ。そのことについて井上くんに文句を言ったが、別に死ぬわけじゃないし、と流された。

俺は日陰を探しながら、歩いた。麦わら帽子で日光は幾らかしのげても、アスファルトが熱い。抜けた空にはもくもくと雲が積み重なっていた。なんとなくその雲を掴んで引き千切ってきて、この身に纏いたい衝動に駆られる。日陰にいるより随分涼しくなる気がする。でも、出来ない。俺の腕はそこまで伸びない。

特に目的もなくふらふら歩いていたら、公園についた。住宅地に入る坂道の脇にあった。近所のはずなのに、見たことのない公園だった。少しのどが渴いていたので水を飲もうと立ち寄ると、飲み口の先に泥のついたペットボトルが突き刺さっていた。近所の子供の仕業だろう。きっと蛇口を全開に捻ればペットボトルの中に水が溜まり、そして水を撒き散らしながらロケットのように飛び出すのだ。

そう考えた。だから俺は、捻った。しかしペットボトルは飛び出す、というよりはわずかに浮き、じき、落ちた。結果、収まる場所を失った水が天高くまで伸びた。水は陽の光を存分に吸い込んで力強く光った。時が止まったような感じがして、水は空の中にそのまま吸い込まれてしまうのだと思った。

しかし、吸い込まれてしまわなかった。

突然水は重力に逆らうのを止め、崩れた。頭上から生暖かい水の粒が降り注いだ。ばちばち、と水が地面にぶつかる音がして、帽子とシャツが次々に濡れていった。ラーメンの汁に浮いている、小さな油がくっついていって大きくなっていくのを思い出した。そして蛇口を再び捻り水を止める。衣服は少し濡れている。びちょびちょではなく少し、というのが気持ち悪い。気持ち悪いので、一枚だけ着ていたティーシャツを脱いだ。汗やら水やらでこもっていた湿気が開放されて心地よかった。風が直に肌に触れて、その風の温かさがどこかこそばゆい。

俺はシャツを木陰のベンチに広げ、その横に腰掛けた。影を落とす木の葉の隙間から、時折陽光が差した。汗が乾いて、俺の白い肌がじりじりと焦げていくのだと思った。心地よかった。意識が頭の上の木の葉のようにさらさらと散らばっていくのがわかった。

しばらくそうしていると、子供の声が聞こえてきた。坂の上のほうから、走ってくるようだった。閉じていた瞼を開けると、二人組みの男児であることがわかる。太ったでかい男児と小柄な細い男児。絵に描いたようなデコボココンビだった。男児たちは何かを投げあいながら公園に入り込んできた。しばらく砂場のほうではしゃいでいたが、やがて細いほうが俺に気づいたようでこちらにとことこ近づいてきた。

「はだかだー」と、言う。

「いけないんだーはだかー」と、太いほうが言った。

「母ちゃんがいった。おとなはそとではだかになったらいけないんだぜ。」

「いいんだよ、別に。服が濡れて気持ち悪いんだ。母ちゃんは間違っている。」

「ばーかばーか」

「ほら、あっち行って遊んでろ。おじさんは忙しいんだ。」

「うるせーホームレス。」と、細いほうが言った。

「失礼なやつだな。家も仕事もちゃんとあるぞ。」

「じゃあ、なにしてんだよ。おれのパパは会社行ってるぞ。」

「偉いな、父ちゃん。俺はさ、ふらふらしてるんだよ。俺はふらふらしたいんだ。」

「こいつ、うそつきだぜ。ふらふらしてるのはニートって言うんだ。俺の兄貴、そうだもん。」

おもむろに俺は立ち上がった。男児たちは一瞬後ずさった。それから財布から小銭を二枚取り出した。

「ほら、これやるからジュースでも買って来いよ。」

男児たちは戸惑いながらやがて嬉々として俺の小銭を受け取り、公園の外に走っていった。あの小銭では二人分は買えまい、せいぜいもめるがいい、と俺は少しおかしな気持ちになり、笑った。それからまたあいつらが戻ってきても面倒なので、公園を出た。

少しだけ乾いたシャツを着て、坂道を登った。まだ濡れて気持ち悪いが、仕方ない。歩いていればそのうち乾くだろう。だから、歩いた。住宅街の中は真昼だというのに静まり返り、どこからかやたらに巧いピアノの音が響いてきた。自分の足音のリズムで気分が乗っていた俺は、ピアノの音に合わせて無性に踊りたくなった。

でも、俺は踊らない。勢いよく飛び跳ねようとしたその時、腹部に奇妙な刺激が生じたからだ。内臓がねじれるようだった。たまらず腹を抱えこみ、うめき声を上げた。腹痛というやつだと思った。俺は朝方に飲んだ牛乳と井上君の顔を思い出す。

腹痛は、切ない。

特に晴れの日の静かな住宅街の中、一人できりで抱え込む腹痛は、特に。

だから、俺は泣きたい気持ちになった。

涙を流す。

本当だ。俺は涙を流した。お腹が痛かったから。そしていい歳をしてこんなことで涙を流せる自分に絶望みたいな思いを抱いたから。

しばらく道端でうずくまっていると、痛みはやがて引いていった。俺は涙を拭いて今まで歩いてきた道をそのまま引き帰した。新しい牛乳はまだ買ってないが仕方ない。もう、牛乳は飲まないのだから、大丈夫。

大丈夫だ。